

# 令和3年度 鹿屋市PTA研究大会

テーマ

鹿屋市「親と子の20分間読書運動」の推進



主催 鹿屋市PTA連絡協議会



# 目次



## あいさつ

鹿屋市P T A連絡協議会 会 長 内野 匡章……………	1
鹿 屋 市 教 育 委 員 会 教 育 長 中 野 健 作……………	2

## 事例発表

鹿屋市立鹿屋小学校 P T A ……………	3
鹿屋市立大始良中学校 P T A ……………	12

## まちなか図書館 活動紹介

株式会社かのやえんがわ社 ……………	16
--------------------	----

## コラム

鹿 屋 市 立 図 書 館 館 長 樫 田 博 史……………	21
--------------------------------	----

## あいさつ

鹿屋市PTA連絡協議会  
会長 内野 匡章

寒冷の候、会員の皆様に於かれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は鹿屋市PTA連絡協議会の活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

鹿屋市PTA研究大会の開催にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡がりにより、1年前には想定できなかったこのような状況の中、「新しい生活様式」のもとで、誌上ではありますが本研究大会を開催できたことや、日頃から子どもたちの健やかな成長と明るい未来を考え鹿屋市全体の教育振興にご尽力いただいておりますことに、心より御礼申し上げます。

さて、近年、子どもたちを取り巻く環境は、ライフスタイルの多様化や人口減少といった身近な暮らしに関わる部分から、ICT環境の高度化やグローバル化といった社会全体に及ぶ幅広い分野まで、大きな変化のうねりの中にあります。このような中、私たち鹿屋市PTA連絡協議会では、年度当初に事業計画書を策定し、未来を拓く子どもたちが変化の激しい社会を生きていくために学校教育の充実のもとより、家庭教育、社会教育等、様々な機会における学習の充実に努めているところです。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により、学校や家庭、地域において様々な変化を余儀なくされることとなり、鹿屋市PTA連絡協議会といたしましても「学校・家庭・地域」の連携の大切さを改めて認識いたしました。こうした連携の強化や教育環境づくりの推進を目標に掲げる単位PTAの皆様の活動は、今後より一層重要になっていくことと思っております。

本大会のテーマ、鹿屋市「親と子の20分間読書運動の推進」では、昨年より提唱された親子での20分間読書の試みが、親子のふれあいや新しいPTA活動の実践へとつながる確かな一歩となり、「学校・家庭・地域」へ還元されることを願っております。

結びに、事例発表をいただいた、鹿屋小学校PTAならびに大始良中学校PTA、活動紹介をいただいた株式会社かのやえんがわ社、また、コラムを執筆していただいた鹿屋市立図書館長、大会誌発行にご尽力いただいた運営委員ならびに役員に感謝申し上げますとともに、PTA会員の皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

## あいさつ

鹿屋市教育委員会  
教育長 中野 健作

令和3年度鹿屋市PTA研究大会が、皆様の御尽力により誌面開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

皆様方におかれましては、平素からPTA活動を通して、青少年の健全育成と学校教育の振興に御支援・御協力をいただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、昨年来、新型コロナウイルスが繰り返し流行し、感染拡大の波が何回もやって来ました。本市でも、コロナウイルスに対するワクチン接種が進み、コロナ感染を防ぐ取組を市民のみなさんにしっかりと実践していただき、最近、コロナ感染者数が急激に減少してきました。現在、いろいろな規制や制限が緩和されつつあり、コロナ前の生活様式も一部取り戻せつつあります。今後も、コロナ感染の再拡大防止のため、マスクの着用や三密の回避、手指の消毒など、基本的な対策を怠らないように努め、一日でも早くコロナ感染症の流行が完全に終息してほしいものです。

ここ十数年、我が国では、社会の状況が大きく変化し、子どもたちを取り巻く状況は厳しく、家庭の教育力の低下、地域社会のつながりの希薄さ、規範意識や倫理観の欠如など、ますます深刻化している現状があります。

そこで、鹿屋市教育委員会では、第3期教育振興基本計画において「未来を担う心豊かでたくましい人づくり」を基本理念に、学力・体力の向上、社会教育・家庭教育の充実等を目的とした様々な施策を展開しております。特に、子どもが言葉や文字に触れ、豊かな情緒の基盤を育むとともに、表現力を高め、創造力を豊かにするための重要な活動として、読書活動の充実・強化を図っております。そのため、令和2年度からは、子どもが読書に親しむ機会や親子の触れあいづくりを図るため、「親と子の20分間読書」運動を、市全体で推進しているところです。

このような中、鹿屋市PTA連絡協議会におかれましては本年度も「親と子の20分間読書」運動をテーマとして積極的に取り組んでいただき、大会冊子にも、事例発表や活動紹介、コラム等、親子が読書を通してふれあう様々な実践を紹介していただいています。人間の知的行動である読書は、未来に生きる子どもたちの思考力を高めるとともに、その情緒を育むとても有意義な活動であります。今後、この成果を各PTAで共有していただき、本市のすべての家庭で実践される機運が、更に盛り上がっていくこと期待しております。

家庭・学校・地域の三者連携の中、PTA会員の皆様には、家庭の教育力向上や子どもたちの安全対策など、子どもを取り巻く課題の解決に向け、より一層の御理解・御協力をお願いいたします。

結びに、鹿屋市PTA連絡協議会および各单位PTAの今後ますますの御発展と、皆様方の御健勝を祈念いたしまして、あいさつといたします。



# 事例発表



## 鹿屋市立鹿屋小学校 P T A

全ての親子の傍らに絵本のある生活を目指して



## 鹿屋市立大始良中学校 P T A

読書好きな生徒の増加を目指す P T A 活動



# すべての親子の傍らに絵本のある生活を目指して

## 鹿屋市立鹿屋小学校 P T A

### 1 はじめに

「本を読むことは、特別なことではない。」そう思える大人と子どもが暮らす家庭・学校・地域。いつも傍らに本があって、本を読む時間や空間が生活の中で大切に扱われている。当たり前のように読む人と聞く人が居て、おはなしの世界を共有し、一緒にいい時間を過ごしている。そんな家庭・学校・地域を目指し、私たちは活動を進めている。

### 2 学校紹介

本校は、創立 153 周年を迎えた歴史ある学校である。校訓に「つよく・かしこく・すなおな子ども」を掲げ、子どもも教師もお互いに成長し合い、一人一人が輝く学校を目指している。シンボルツリーのイチヨウは、夏には緑の葉を、秋には黄色い葉を枝いっぱい茂らせ、子どもたちの日々を温かく見守っている。卒業した子どもたちは、おそらく、銀杏の匂いとともに楽しかった小学校生活を思い出すのではないだろうか。

平成 30 年度より、鹿児島県総合教育センター研究提携校となり、毎年、研究の発表の場として「オープン・スクール in 鹿屋小」を実施している。大隅地区の学びの拠点校として鹿屋中学校と連携を図りながら、特色ある教育活動の充実を図るべく、研究を推進している。

### 3 本校 P T A 活動の概要

本校 P T A は、スローガン「学校に感謝 地域に感謝 毎日に感謝」を掲げ、子ども・保護者・教師がともに成長できる P T A 活動を目指して活動に取り組んでいる。

組織は、総務部、学年部と 5 つの専門部で構成されている。その他、有志によるボランティア部として、おやじの会、読み聞かせグループ『すてっぷ』がある。

読み聞かせグループ『すてっぷ』は、日頃の活動が評価され、平成 30 年に公益社団法人読書推進運動協議会による第 51 回全国優良読書グループ表彰を受賞している。



すてっぷによる活動（打馬育成会の歓迎会と 11 月の大型読み聞かせ）

登校時は、我が子が卒業した後も、スクールガードとして立哨指導をしてくださっている元会員が多数活躍している。挨拶を交わしたり、温かい声掛けをしてくださったり、子どもたちの朝が気持ちよくスタートするよう見守ってくださっている。

学ぶことができる幸せ、地域の方に応援していただける幸せ、当たり前なのが当たり前でできている幸せを感じながら、地域の中で子どもたちと楽しい時間を過ごしている組織である。

#### 4 読書推進活動の現状について

##### (1) これまでの取り組みと現在の活動体制

本校のPTA読書指導部は、令和2年度に新設されたばかりの専門部である。それまでのPTAによる読書の推進活動は、主に読み聞かせグループ『すてっぷ』（以下すてっぷ）がその役目を担っていた。PTA読書指導部新設後もすてっぷの活動はそのまま保持され、読み聞かせやおはなし会等の活動を継続している。つまり、本校には、子どもたちの読書活動を支えるPTA組織が2つあるということである。専門部（読書指導部）とボランティア部（すてっぷ）の二本柱で活動を進めているということは、新しい風を吹き込みながら、継続的に推進活動が行える環境が整っているということが言える。

すてっぷによる朝の読み聞かせ活動は、毎回すべての学級を網羅できるわけではなく、毎学期1学級当たり数回の頻度でしか教室を回ることはできない。それでも、これまですてっぷがコツコツと続けてきた読み聞かせ活動の成果は、子どもたちの読み聞かせを聞く姿に表れている。

PTA読書指導部が新設され、まずは朝の読み聞かせをしよう！とコロナ禍でもスムーズに動き出したのも、すてっぷがこの活動の土台を作っていたからこそだと感じる。

他にも、朝の読み聞かせ活動には、1年生の教室で1年生の保護者が絵本の読み聞かせを行う活動「ほっぷタイム」がある。しかしこの活動は、その年にこの活動を世話する保護者頼みであり、安定した活動とは言えず、継続していくことが難しかった。また、学級によって参加できる保護者数に偏りなどがあり、バランスよく計画することも難しい。今後の課題として考えていきたい。

##### (2) 令和2年度PTA読書指導部の活動内容

新型コロナウイルス感染拡大の影響により始動が遅れてしまったものの、新設1年目の中、手探り状態ではあったが、以下の4点の活動を計画し実施した。

活動時期	活 動 内 容	参加人員
前期 7月 後期 1月	<b>【実態調査】</b> 前期「保護者の読書に関する調査」 後期「おやこ1冊読書に関する調査」 保護者の意識や変化について調査を実施した。	調査対象 全家庭

10月～11月	<b>【読書月間 朝の読み聞かせ活動】</b> 10/8(木) 事前研修 10/20(火) 低学年 10/27(火) 中学年 11/10(火) 高学年 各クラス2～3名ずつで20分間の読み聞かせを実施。	PTA 読書指導部 41名 (全部員)
9月～2月	<b>【おやこ一冊読書】</b> 月に一度、第2土曜日におやこで読書。 語り合ったことを記録シートに記入して提出。	全家庭 (児童1名 につき 1枚ずつ)
11月、12月	<b>【おやこ一冊読書 活動紹介】</b> 各クラスより1名ずつ学級担任が選出し、記録シートを紹介するおたよりを配布。 担当教諭が作成・印刷。	全家庭 配布

### (3) 読書指導部が新設されたことによる読書の推進活動の変化

#### ア 朝の読み聞かせ活動を多くの保護者に経験してもらえたこと

読み聞かせグループ『すてっぷ』に所属している保護者は、児童数約550名に対し、常に10～15人である。決して多いとは言えない。毎年勧誘活動をしているが、特に仕事をしている方、小さな子どもがいる方には、入会に勇気のいる活動ではないかと思う。有志によるボランティア活動であるため、一部の特別本が好きな保護者の活動、私がしなくてもいい活動というイメージを抱かせていた。

しかし、PTA読書指導部が朝の読み聞かせを活動内容に取り入れたことによって、PTA読書指導部の部員全員に朝の読み聞かせ活動を体験してもらうことができた。また、すてっぷの、各教室につき一人というやり方にこだわることなく、読書指導部では、我が子の教室に数名で、という方法を取ったことによって、比較的チャレンジしやすい活動が整えられたように思う。この活動に参加したのをきっかけに、すてっぷに入会した保護者がいたことも大きな動きだった。

実際に活動してみた読書指導部員の様子や感想は、7. 参考資料（朝の読み聞かせ活動 活動報告）を参照いただきたい。



## イ 子どもたちの読書環境に目を向けるきっかけになったこと

朝の読み聞かせに行くと、朝の読書タイムに別の活動をしているクラスの様子を見かけることがあった。違和感があったものの、限られた時間の中で学力向上を目指す子どもたちにとっては仕方ないことだとそれまでは捉えていたし、すてっぷの活動でそれらに働きかけるのは難しいのではないかと考えていた。しかし、PTA読書指導部として子どもたちの読書環境について向き合ううちに、学校図書室の貸出システムや学級文庫の状態、市立図書館の移動図書館車ほたる号の活用状況など、子どもたちの読書環境を整えることの重要性に気付くことができた。これらの環境をひとつずつ整えるべく、関係機関と情報を共有し、具体的な解決に向けて活動を進めているところである。

## ウ 子どもの読書活動について話題にする機会が増えたこと

これまで、各学級で家庭学習のひとつとして取り組んでいた『おやこ一冊読書（令和3年度は「家庭読書週間」と名称変更）』をPTA読書指導部が主体となって取り組むことによって、学級PTAで読書指導部側から活動について話題提供し、保護者同士で意見交換をすることができた。鹿屋市「親子の20分間読書」運動に基づいて実施している点については、まだ周知が充分でないと感じているが、学校全体で取り組んでいる活動という認識を保護者に広めることができた。

## 5 今後の課題について

### (1) 続ける

読み聞かせ活動を続けやすい環境・仕組みづくりを整える。

### ア すてっぷ

PTA読書指導部で朝の読み聞かせ活動を経験した保護者が、すてっぷとして無理なく活動を継続できるよう連携を図る。PTA読書指導部のように、数名で1クラスを担当したり、慣れるまでは互いにフォローしたりする体制を整える。

### イ ほっぷタイムの活性化

1年生限定の活動として進めてきたが、時期を分けて他学年にも活動を広げていく。世話役をどう位置付けるかが今後の課題である。

### (2) 広げる

家庭に。地域に。読み聞かせの輪を広げる。

### ア 家庭でもう一度わが子に

まずはPTA読書指導部で朝の読み聞かせ活動を経験した保護者が、その絵本を家庭で読み

聞かせることから。子どもは、自分の親が友だちの前で読んでくれた絵本を、もう一度自分に読んでほしいと思っている。これが次の「深める」にもつながっていく。

#### イ 学校応援団の活用

卒業生の保護者や地域の方にも協力していただき、朝の読書タイムにどの教室からも読み聞かせの声が聞こえるようになったら嬉しい。

### (3) 深める

子どもたちが出会った本を、いつでも何度でも自ら手に取ることができる環境を整える。

#### ア 学級文庫の充実

各学級の学級文庫の老朽化が進んでいる。また、学級担任が私物を提供している場合も多く、学級によって充実度に差がある。

例えば、バザー等の機会を活用して、読まなくなった本の寄付を募る。PTA読書指導部で修繕し、各学級に配置する。修繕方法の研修を実施することによって、本を大切にする心も広がる。

#### イ 学校図書室の活用

家庭読書週間で読む本を図書室で借りている子どもが約6割（後期実態調査より）という実態があり、学校図書室は、子どもたちの読書活動に大きな影響を与えていることがわかる。現在は、パソコン1台で貸出と返却作業を担っている為、朝の活動前に返却しなければ昼休みに借用できないというシステムになっている。パソコンでの管理が子どもたちのためにならないければ意味がない。

#### ウ 市立図書館との連携

##### \*移動図書館車「ほたる号」

ほたる号の来校時間を昼休みに変更していただき、多くの子どもたちが利用しやすくなった。安心安全メール等を活用し、PTA読書指導部からも来校日を周知し、さらに利用を増やしたい。ほたる号の利用が市立図書館の利用につながり、親子で本を手に入る機会が増えることを期待している。

##### \*バナナ文庫

令和3年度のPTA読書指導部の活動として、すでに進めている活動である。市立図書館の書庫から各学年30冊ずつ定期的に貸出を受けて、学級文庫として利用している。バナナ箱に納めて貸出・管理しているため、「バナナ文庫」と命名した。子どもたちが親しみをもって利用している。古い本が多く、管理の難しさはあるが、物を大切に扱う教育活動のひとつにもなっている。すでに廃版になっていて書店では買えない本が読めるのは、やはり図書館の良さだと感じている。

## エ 選書や読み方に関する情報の共有や情報交換

これはすてっぷの役割として知識や技術の向上を目指す。P T A読書指導部が環境を整える役割を担い、すてっぷが専門的な知識や技術を深め、伝える役割をすることで、本校の「二本柱」が生かされてくると考える。

## 6 最後に

P T A読書指導部の活動を通じて、鹿屋市「親と子の20分間読書」を進めるにあたり、以下の3点について考える機会となった。

- \* 「親子」の定義
- \* 「20分間」の定義
- \* そもそも読み聞かせとは？

実態調査の結果から、「親と子」と表記すると、どうしても「お父さん・お母さんと、その子どもひとりひとりと」というイメージを与えてしまうことがわかった。それらの言葉に苦しむ保護者の姿も見え、もっと気楽に、楽しんで活動に取り組んでもらいたいと感じた。そこで、令和3年度の活動では、「おじいちゃんおばあちゃんと」でもいいし、「きょうだいで」でもいいのではと提案し、活動を進めることにした。また、子ども一人一人に1対1で応じるのではなく、1冊の本を家族みんなで楽しむ時間を過ごしてもいいのではないかという思いを込めて、「家庭読書週間」と名称変更した。

「20分間」という表記も、長いと感じる家庭もあり、「まずは5分」どんな方法でもいいから、「我が家に合った家庭読書の時間を育んでいきましょう」と毎月呼びかけ続けている。

親子で絵本を読むことは、ただ一緒にいい時間を共有するためだと思っている。絵本を手段に、何かを伝えたり教えたりしようとする必要はなく、絵本を読む行為そのものが目的であり、それ以上のものは後になってゆっくりゆっくりついてくるものだ、これまでの経験が教えてくれる。

朝の読み聞かせ活動を続けてきたことも同様で、ただ鹿屋小の子どもたちといい時間を過ごしてきた。子どもたちはおはなしの世界を味わい、ゆったりとした気持ちで学校生活をスタートさせる。読む側も子どもたちのすなおな反応から元気をもらう。言わば、エネルギーの交換の時間である。特に高学年の選書では、お話を通じてエールを送ったり、普段の会話が上手く心通わないことを補ったりしたくなることはあるが、あまり難しく考えず、その時間を楽しむことを第一に考えたらいいのではないかと感じている。

朝の読み聞かせ活動から、家庭や地域に本に親しむ姿が広がり、いつも傍らに本があって幸せに過ごす親子の姿が当たり前にあるといいなと思う。これからも、その思いを持って、コツコツと活動を積み重ねていきたい。

## 7 参考資料

令和2年度に実施した朝の読み聞かせ活動に関する活動報告を、参考資料として添付する。

### <参考資料>

#### 鹿屋小 PTA 読書指導部 朝の読み聞かせ 活動報告

##### 1. 実施日

令和2年10月20日(火)：低学年    10月27日(火)：中学年    11月10日(火)：高学年

##### 2. 活動目的・背景

今年度新設された専門部。まずは、朝の読み聞かせをやってみよう！

1人で教室に入るのはとても勇気が要るから、各クラス部員全員でやってみよう！！

##### 3. 参加者

各クラスの読書指導部員 全員

\*児童が複数人在籍する場合は、長子クラスでの参加。2名以上で実施できるよう調整。

\*当日、急きょ欠席した部員については、別日で実施できないか連絡し、調整した。

(2名欠席→1名は別日実施、もう1名は実施不可)

##### 4. 活動内容(当日) \*事前研修 10月8日(木)16:20~17:00 鹿屋小図書室にて実施。

8:23 教室前にて静かに待機。(マスク着用、手指の消毒)

8:25 担任の先生の指示に従い、入室。朝のあいさつ。

本の紹介後、読み聞かせをする。最後に読んだ本の題名をふりかえる。

8:45 あいさつをし、退出。

クラス毎にふりかえりシートに記入をし、提出後解散。

##### 5. 成果(ふりかえりシートより)

① 2人で読んだ 6学級    3人で読んだ 11学級

②読み聞かせをした感想は？

###### 気持ち

緊張したけど楽しかった。(多数。心臓が飛び出そうだったという意見も。)

子どもが小学生のうちに、このような経験が出来てよかった。(6年)

###### 時間配分

ちょうどよかった。(ほとんどのクラス。事前の時間計測、多めに冊数準備をお願いした。)

最後にじゃんけんをしてちょうどよかった。

\*3人中2人しか読めなかったクラスがあり、別日に読む時間を確保した。

## 絵本選び

わが子に協力してもらった。読みやすい・読み慣れている絵本を選んだ。

多めに準備し、当日子どもたちに選んでもらった。

年齢に応じた内容を考えると、どうしても長くなってしまい、苦勞した。(高学年)

図書室の先生にアドバイスをいただいた。事前研修を参考にした。

## 読み方

1人1冊ずつ。

役割分担をして読んだ。(ナレーターや登場人物のセリフ)

マスクで声が届きにくいので、大きな声で読んだ。

感情を込めて読んだ。

全員が見やすいように、配慮しながら読んだ。

緊張して、早口になってしまったかも。



③子どもたちの反応はどうでしたか？

最初は緊張している様子だったけど、笑顔をたくさん見ることができてうれしかった。

子どもたちの聴く姿が大変よく、集中して聴き、反応がとてもよかった。(全てのクラス)

手遊びなどのノリもよかった。もっと読んで！との声もあった。

読み終わったら拍手をする習慣ができていてすごいと思った。

本の題名をメモする姿もあったので、黒板に書けばよかった。

隣のクラスが盛り上がっていて、集中できない姿があった。

## 6. 所感

活動に対する部員さんたちの意識がとても高いと感じました。

事前研修は、各クラス1~2名の出席をお願いしていましたが、全員で出席したいというクラスもあり、短い時間でしたが熱気あふれる時間でした。また、図書室の本を借用できるよう、先生方が準備してくださったのも大変ありがたい配慮でした。

部員さんたちが、真剣にそして楽しんで準備したからこそ「楽しかった」という感想だったと感じます。そして、そのおうちの方の一生懸命な姿を、子どもたちはちゃんと見ていることを改めて感じる事が出来ました。

朝の読み聞かせは初めての経験という方が多く、始まるまでは、みなさんととても緊張している様子でしたが、いざ始まると、生き生きとした姿がたくさん見られました。また、子どもたちの嬉しそうな表情を、部員さんたちに見てもらえたことが何よりの成果だったと感じています。

さらに、服を黒で揃えたり、折り紙のプレゼントを準備したりしたクラスもあったようです。また、日本語が苦手な部員さんは、英語であいさつを披露してくれました。各々が、どうしたら子どもたちに楽しんでもらえるか主体的に考え実行したことが素晴らしい！

今後、この「楽しかった」「嬉しい」気持ちを鹿屋小全体に広げていくためには、他の組織との協力体制が必要と考えます。

## 7. 今後の課題・改善点

年に2回以上実施できると、今回の気づきを次回に活かすことができる。

事前研修は、全員参加を検討する。（内容の周知、クラス毎の打ち合わせの時間を確保。）

事前研修は、市立図書館での実施も検討する。（作品の選択肢の幅が広がる。絵本の借用が容易。）

今後の参考に、読んだ絵本のタイトルを記録に残す。

今回で終わることなく、続けてもらうためにはどうすればよいか、具体策を出す。

なぞなぞや手遊びが主になっていたクラスも、目的の共通理解、具体的なサポートが必要。

# 読書好きな生徒の増加を目指すPTA活動

## 鹿屋市立大始良中学校PTA

### 1 はじめに

本校では、PTA活動の専門部に総務部・保健体育部・生活部と並立して読書活動推進部を設置している。各学級から1～2名程度の保護者が所属して活動している。今回はこの大始良中学校PTA読書推進活動部の活動を事例として報告する。

### 2 読書推進活動部の活動の目的

小学校から中学校と、子どもの年齢が上がるにつれ、全体的な読書量が減少する傾向がある。これには、平均的に読書量が減っているのではなく、読書をしない（やめる）生徒が増加しているという原因があると考えられる。家庭でも、より勉強に費やす時間が重視されていくこと。余暇の過ごし方がデジタル端末に置き換わってきていること。などの理由で、読書を行わない人が増えてきているといえる。中学校においては、読む生徒と読まない生徒の二極化が進んでいる。

本を読んでこなかった、あるいは読むのをやめてしまった生徒に、改めて読書の有用性、面白さに気づいてもらえるよう、保護者による読書推進活動を通じて、中学生に読書をより身近なものとしてとらえさせ、毎日の生活習慣の中に取り入れられるようにしたいと考えている。

### 3 活動の内容

#### (1) 朝の読み聞かせ

大始良中学校では、毎週水曜日と第2土曜日の朝に朝読書の時間が設定されている。その時間に、1学期と2学期の各1回ずつ、PTA読書推進活動部員による読み聞かせを実施している。この時間は、各学級に1～2名の保護者が入り、学級担任の進行のもとで、全校で一斉に読み聞かせを行う(写真1・2)。



<写真 1>



<写真 2>

読み聞かせを行う保護者は経験豊かな方から初めての方まで様々である。事前に練習会を設けて、お互いにアドバイスを受けたり、使用する本を薦め合ったりして協力的な形で行えるようにしている。

使用する本は、基本的に読み聞かせを行う方々に選んでもらっている。自分が担当する学級の年齢層や読み聞かせを行う時期などに合わせて選ぶので、絵本や童話からビジネス書まで様々である。本は私物を用いることが多いが、鹿屋市立図書館から借りてきたもの、学校図書館のものも利用している。

右の写真3は、中学校の先生の協力を得て、教室に設置されている電子黒板とタブレットを利用して、保護者が読み聞かせを行ったときの様子である。

学校のICT機器が充実してきているので、非常に簡単にこのような準備もできるようになった。コロナ禍で生徒同士が距離をとらなければならない状況でも、このような形であれば、教室後方の生徒にも十分絵を見せられるため、今後も継続したい方法の一つである。

このようにして、各学級で生徒が自分の座席 **<写真 3>**で読み聞かせを聞く形を基本としているが、読書活動推進部の人数が少ないときには、学級をまとめて多目的教室や体育館で行うこともあった。(写真4・5)



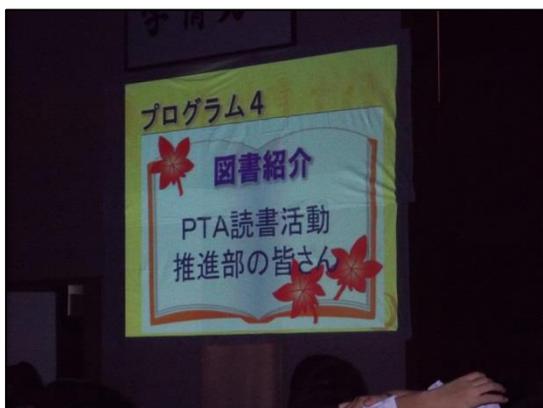
**<写真 4> 多目的室**



**<写真 5> 体育館**

## (2) 文化祭への協力

年度により内容は異なるが、11月上旬に行われる中学校の文化祭で読書推進につながる活動を行っている。



<写真 6>



<写真 7>

上の写真6・7は、2019年の大始良中学校文化祭におけるステージ発表の部に読書推進部の保護者がブックトークで出演した際のものである。前述の読み聞かせもそうであるが、意欲的に取り組んでくださる部員の方のおかげで実現することができた。

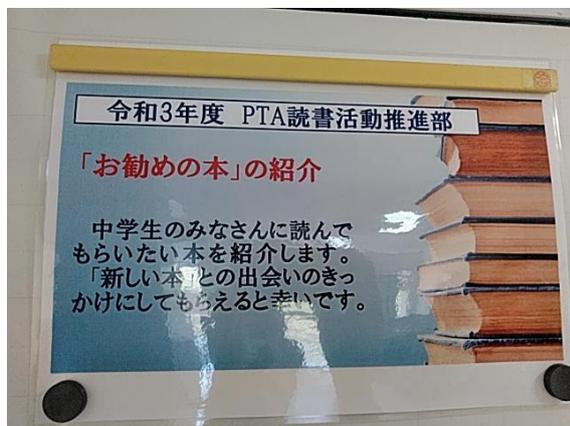
また、以下の写真8～11のように、展示物として本の紹介カードを作成し、掲示している。



<写真 8>



<写真 9>



<写真 10>



<写真 11>

これらの本の紹介カードは、文化祭終了後には、学校の巡回司書の協力を得て、学校図書館等に掲示をしたり、特別な図書コーナーを設置したりして、文化祭後も多くの生徒の目にとまるよう工夫している。(写真 12)



<写真 12>

### (3) 学級文庫の選定と補充

大始良中学校の学級文庫は学校で学級に分配している本に加え、学級担任が不要になった本や読ませたい本を比較的自由に設置している。しかしながら、この方法であると、それぞれの学級で分量や内容に偏りが生じてしまう。多様な本を日常的に手に取れる環境を作れるように、読書推進部員の選定で学級文庫を補充するように取り組んでいる。

具体的には、PTA活動費として読書推進部に配分されている予算を使い、部員の方々に古書を購入してもらい、それをバランスよく分配する。その際に巡回司書の協力をもらい、フィルムで表紙の補強をして教室に設置するようになっている。

## 4 成果と課題

具体的な調査を行ったわけではないが、朝の読み聞かせ、文化祭への協力の取り組みは、中学生にとっても一つのイベントとして、好意的に捉えられていると感じる。これまで、「中学生に絵本の読み聞かせ？」等と活動に疑問を持たれることもあったが、ストレスを抱えるなどして心を疲れさせている中学生にとっては非日常的な癒やしの時間になっている側面もあるように思われる。学校の先生とはまた違う、身近な大人による読み聞かせや本の紹介は、特に実生活で読書から乖離してしまっている中学生にとっては、刺激になるのではないかと考える。

課題としては、これらの活動がPTAの活動として少し敷居が高いと捉えられている点が挙げられる。PTA専門部の活動であるので、部員は毎年入れ替わる。それにより、積極的に読書推進に関わろうとする部員が多いときと少ないときと波があることは事実として否めないところがある。多くのPTA会員に中学生に対する読書推進の重要性を認識してもらい、活動の輪を広げていくことが必要である。



# まちなか図書館 活動紹介



株式会社 かのやえんがわ社

「お外で読書をしよう」



「お外で読書をしよう。」  
～かのやえんがわ社のとりくみ～

第一章 Imagin

それは、新緑が芽吹く五月のある日の出来事だった。海辺の町にある事務所でパソコンと向き合い作業をしている私の携帯電話に一本の連絡がはいった。

「仕事の打ち合わせが近くであったもんだから帰りによるわ。」

その数分後、作業着の上着にスラックスといういで立ちの福満先輩が事務所に顔を出した。

私と福満先輩は十年ほどの付き合いで、現在ではその他の友人数名と「かのやえんがわ社」という会社を立ち上げ、霧島ヶ丘公園の一角で公園の活性化をはかるため事業を展開している仲である。



「かのやえんがわ社」とは、豊かな自然の恵みにあふれた鹿屋市で、その魅力を楽しみながら、人々が気軽に立ち寄り、であい、語りあえる、あたたかな縁側のような新しいたまり場をコンセプトとして活動している。現在はコンテナハウスにて飲食店がメインに出店している施設なのだが、私は、飲食以外にも今後は利用できないものかと考えているところであった。

話はもどるが、福満先輩は買ってきた缶コーヒーを片手に事務所の中を見回していた、すると何かに気づきコーヒーを口に運んでいる私に話しかけたのであった。

「なかなか面白い本を読んでいるんだな。」

「ええ。ある YouTuber がおすすめだと言っていたので、だまされたつもりで購入してみました。」

「で、どうだった？感想は？」

「読書は今までほとんどしたことなかったんですけど、結構はまりました。YouTuber のファンだったうえに興味のあることだっただけに文句なしの本でした。」

そう、私はこの年になるまで読書とは無縁の人生を送ってきていたのだが、本を読むことで自分の知らない知識を得られることを実感し、読書をするようになりつつあったのだ。

その時、「かのやえんがわ」の新しい展開として読書を取り入れてもいいのではなからうかと

脳裏によぎったのだった。

「先輩、公園で本を読むのっておしゃれじゃないですか？公園の木陰や日陰で読書できたら気持ちよさそうですね。」

「うん。親子で読書している風景とか見られたら運営側としても、やっていてよかったなと思えるかもしれない。」

このような会話から生まれた読書に関するアイデアから、かのやえんがわの新しい取り組みが始まっていくのであった。

## 第二章 まちなか図書館との出会い

私は「かのやえんがわ」が読書できる環境になるために、まずは何をすればよいか考えた。素人考えで、とりあえず本を準備しなければならないという結論をだし、自分の店舗や事務所にあった本をすべて持参した。しかし、読書初心者の私の持っている書籍数は極わずかであった。くわえて、私の興味のある分野しかなく、どう考えても色々な方が楽しめるとは思えなかったのだ。



「こんなんじゃ読書したくなるのは私だけだな・・・」

苦笑いを浮かべつつ本を自費で購入する覚悟を決めるのであった。

その後、時間を見ては古本屋を巡ったりしながら本を購入したのだが、思いのほか資金が足りないのが現実であった。そこで、本をどのように調達すればよい

か福満先輩に相談することにした。

「鹿屋市役所の生涯学習課で、まちなか図書館という事業をしているみたいだから問い合わせてみるよ。」

そう、私は全く知らなかったのだが、行政も読書推進事業として「まちなか図書館」という活動を行っていたのである。



「まちなか図書館」は鹿屋市が「親と子の 20 分間読書」運動を推進するため、バス待合所やリナシティかのや・市民協働ショップ KITADASARUGGA・公民館等に「児童書・絵本・一般図書」などの書籍を設置したものである。ここにある本は自由に持ち帰り、読み終わったらこのまちなか図書館でも返却することができるシステムになっている。

「本って意外と価格が高い」「保管する場所がない」「読まなくなった時の処分に困る」「図書館まで行く時間がとれない」などといったデメリット的な声があるなか、「まちなか図書館」のシステムは素晴らしいものであると感じることができた。私たちはさっそく生涯学習課の担当の方に設置の依頼をしたのであった。

五月の末、多くの方の協力のもと「まちなか図書館」がかのやえんがわにも設置された。ストリートピアノのおいてあるテナ内に。

公園で読書をする人々のすがたがこれからみられると思うとワクワクが止まらない私であった。

### 第三章 おなじころざし

本の収集に焦っていた私は「まちなか図書館」の設置以外にどのようにすればよいか考えていた。

ある日の晩、福満先輩に誘われ食事に出た。そこには、先輩ともう一人仲の良い写真家の川筋先輩が同席していた。彼も 10 年ほど前から親交のある方で、地域の活性化について熱く考えている人間の一人であった。軽くお酒も入り、たわいもない話をしている中、ふと読書についての話題になった。

「最近、本を読むようになったんですけど購入するのにけっこうコストがかかるんですね。」

「よっぽど好きじゃなければ、そこにお金をかけるのはむずかしいことだね。」

「かのやえんがわに、小さな図書館みたいなものを作りたいんですけど、本を集める手段ってないかないでしょうか？」

そう尋ねると、少しの沈黙のあと写真家の先輩は自分のスマートフォンを取り出し、操作しはじめた。

「あ、お兄ちゃん。今から一緒にご飯たべない？」



この一本の連絡からとんとん拍子でことが進んでいくとは私は想像すらできていなかったのだった・・・。

次の日曜日、私たちは五月晴れのもとかのやえんがわの運営に励んでいた。するとそこへ段ボール箱を抱えこちらに歩んでくる笑顔の素敵な親子の姿が見受けられた。

「おまたせ。」

笑顔で声をかけてくれたのは、あの時のお兄ちゃんと呼ばれていた（株）カナザワの金沢一守さんだった。あの晩、本の調達で苦勞していることを相談したのである。すると、会社に処分をする目的で持ち込まれた本を、読書のできる環境を作りたいという私たちの想いに賛同していただき、持ってきてくださったのである。

「せっかくの本も読まなくなっちゃうと処分の対象になっちゃうもんね。こうやって、他の人たちに読んでもらえる環境もあると資源として再利用されていいと思うよ。また集まったらもってくるね。」

そう言って、多くの本を寄贈してくださったのである。

こうやって着々と準備が進み、我々の新しい取り組みは現実味をましていったのであった。

#### 第四章 かのやえんがわ社の思い描く未来

本の充実、「まちなか図書館」の設置により、かのやえんがわに読書ができる環境が整った。現段階では、ここで過ごす方たちが各々で読書を楽しむことができるようにはなった。



どのような方が実際利用しているのか把握したいと思った私は、匿名で記入が可能な利用者名簿を作成して本棚の隣に置いてみた。初めころは反応はなかなかなかったのだが、「本を借りました」「こんな本を置いてほしいです」「とても楽しかったです」などのコメントの記入を目にするようになった。人数も予想していたよりもはるかに多くの方が利用されている様子だ。

親子で読書をしている姿も目にするようになり、その景色をみて、私たちの目指しているものはこのようなことなんだと再確認した。

読書を通じて親子がコミュニケーションをとり、親の愛情を子どもが感じ取り同じことを次世代へとつなぐ人へと成長していく。その成長し



た一人一人があつまりより良い社会を形成する人財へとになっていく。そのような環境を一企業として提供し続けたいと思うのであった。

今後は、親子での読書だけではなく地域で活動している読み聞かせグループや保育士さん、ボランティアの方々の協力も得て読み聞かせのイベントも行っていきたいと計画している。

読み聞かせに関するメリットは教育機関や研究機関によって示されている。その中でも大きく取り上げられていることが、「語彙が増える」「集中力が増す」「想像力が豊かになる」「コミュニケーション能力が向上する」といったことだ。このような能力の向上は、成長して社会の一員となる時に必要なものだ。地域の宝である子どもたちを育てるため、これからは企業や地域も手を取り合い読書のできる環境を整備していく必要があると私たちは考える。このことにより、明るく楽しい未来を子どもたちが描き実現できるように。





## コラム



鹿屋市立図書館

館長 檜田 博史 氏

「図書館と親子読書のすすめ」



## 「図書館と親子読書のすすめ」

鹿屋市立図書館  
館長 檜田 博史

みなさんにとって図書館とはどのような場所でしょうか。静かに読書をするところ、本を借りるところ、勉強するところ、調べものをするところ…利用される方の目的によってさまざまだと思います。では、子どもたちにとって図書館とはどのような場所なのでしょう。

今回、鹿屋市で取り組まれている「親と子の20分間読書」運動をテーマに、図書館における親子の読書についてあらためて考える機会をいただきました。私自身、鹿屋市立図書館以外にもいくつかの図書館で勤めてきましたが、どの図書館においても子どもの読書活動や親子読書には一際力を入れて取り組まれています。読み聞かせを行うおはなし会をはじめ、年齢別におすすめ本を紹介するブックリストを作成したり、さまざまなイベントを開催したり、親子で読書に親しみ読書習慣を身につける工夫を凝らした取り組みがなされています。

鹿屋市の「親と子の20分間読書」運動では、読書を通じて親子のふれあいを大切にすることが掲げられ、具体的な内容としては、子どもが声に出して本を読むこと、家族がじっと耳を傾けること、そして親子で本の内容について感想を言ったり褒めたりすることが勧められています。そこで読書を通じた親子のコミュニケーションの大切さを踏まえて、家庭での親子読書に通じる図書館の取り組みをいくつかご紹介していきたいと思います。

子どもたちにとって絵本の読み聞かせは家庭でも馴染みのある読書の一つだと思います。そこである図書館のイベントでは、普段は読み聞かせをしてもらう側の子どもたちに読み聞かせる側に挑戦してもらったことがあります。未就学児や低学年児童の親子を対象にしたイベントで、いつも絵本を読んでくれている家族に好きな本を読んでお返ししようという趣旨の親子朗読会です。ステージに親子で登壇し子どもがお気に入りの一冊を読み聞かせ（朗読）するという、いたってシンプルな内容です。

読み手の子どもたちは大勢の前で本を読む緊張、練習してきた努力の跡、読み終えたときの安堵と満足気な笑顔など、様々な表情を見せてくれました。その様子を温かく見守り、子どもの読み聞かせに耳を傾ける家族の姿はとても微笑ましく、家庭でも読書を楽しんでいる様子を垣間見ることができました。また、乳幼児期は保護者の方が子どもに読み聞かせる絵本を選び、発達段階が進むにつれて子ども自身が本を選ぶようになり、自分で読めるようになる、図書館でもよく見られる光景ですが、そんな読書を通じた子どもの成長を感じられるイベントになりました。

読み終わった後には観客から発表者へ一番好きな場面やその理由などを質問してもらいます。すると子どもたちはお話の内容や登場人物について本の魅力をどんどん語り始めるのです。大きくなるにつれて一人で黙読することが多くなり、読書を通じて自分の考えや感想を表現し他者と共有する機会

は少なくなるように思います。しかし、子どもたちは違います。図書館でも子どもたちは好きな本と出会うと、私たちにも感想を聞かせてくれることがあります。本を読むことで新しく得た知識や「おもしろい」「楽しい」といった気持ちを聞いてほしい、誰かと共有しようとコミュニケーションを図ってくるのです。周囲がこれに共感し応えることで子どもの自己肯定感や承認欲求が満たされるのかもしれない。親子で読書を通じたコミュニケーションに取り組む大切さがここにあるように思います。

読書の楽しみ方も子どもの興味関心によって変化します。物語の世界に夢中になって読み耽ることもあれば、新しい知識や情報を得ることに喜びを感じることもあります。図書館には絵本や読み物だけでなく、歴史、社会、科学、芸術、スポーツなどさまざまな分野の本があり、大人が本を読んで知識を得ると同じように、感受性豊かな子どもにとって身の回りにあふれる「なぜ」「どうして」に答えて探求心を育んでくれるものです。読む楽しさに知る楽しさが加わる、そんな子どもの知的好奇心をくすぐる読書活動の一つに「理科読」というものがあります。

「理科読」とは、科学の本の読み聞かせと実験を組み合わせたもので、「空気」や「電気」などテーマを決めて関連する実験・工作と科学絵本の読み聞かせを行います。科学絵本は図鑑や事典を読むのがまだ難しいという子どもにも科学のしくみや不思議を分かりやすく教えてくれます。そして、実験や工作を通じた「見る」「触れる」「考える」といった体験は、子どもの興味関心をいっそう高めてくれます。知識と体験が合わさることで、より理解が深まる読書活動なのです。

イベントでは科学を専攻する学校の先生や大学生に指導にあたってもらい、電気がテーマの時には静電気をつかった「百人おどし」という実験を行いました。多人数で手を繋いだ状態で体を電気が流れる実験で、ビリッと電気を感じると子どもだけでなく大人からも感嘆の声があがって盛り上がり、ワクワク・ドキドキする体験は年齢に関係なく楽しい様子。知識として知っているのと実際に体験するのでは得られる感動にも大きな違いがあると感じました。また、イベント後に関連する本を読んで家庭でも他の実験や工作をやってみたいという家族が多いのも特徴的です。親子で共通の楽しみや関心を持つことによって親子読書の幅も広がっていきます。

図書館のイベントから家庭でも実践できる読書活動の事例を二つ紹介しましたが、共通するのは親子で「楽しむ」という点です。子どもが本を読んで楽しいと思う気持ちを大人も共有することが親子読書のポイントだと思います。子ども向けの本は大人が読んでも新しい発見がありますし、子どもの頃に読んだ本も年齢を重ねてから読むと当時とは違う印象を受けることもあります。親子で本を読む時には、童心にかえって子どもと同じ視点で読書を楽しんでみてはいかがでしょうか。

また、読書に限ったことではありませんが、子どものやる気や興味関心を持続するには、褒められたり認められたりする成功体験が大切です。先に紹介した朗読会のイベントで、ボランティアで参加していた高校生が幼い頃に親といっしょに絵本を読んだときの思い出を語ってくれたのですが、嬉しい思い出は成功体験の一つとしていつまでも子どもの心と記憶に残るのだと感じました。

子どもにとって本を読むことが「楽しい」「嬉しい」と感じられる経験をたくさん積み重ねることで、

自発的な読書習慣やコミュニケーション能力が育まれるのではないのでしょうか。保護者のみなさんには、子どもといっしょに同じ一冊の本を読んで、ふれあう時間をより多く過ごし、たくさんの「楽しい」を共有していただきたいと思います。

最後に、なぜ子どもに読書が必要なのか。それは育まれた読書習慣は、将来にわたって子どもたちの「生きる力」になるからだと思います。子どもが本を読むことで、語彙力、読解力、想像力、思考力、表現力などが養われると言われていますが、これらはすべて子どもたちが社会の中で生きていくうえで大切なものです。

読書を通じて、子どもたちは著者や登場人物など他者の考えを読み取り、気持ちをおしはかる力や、自分以外の考えを知ることで広い視野や見識を身につけることができます。そして、子どもたちは成長するにつれて自己の考えや気持ちを表現し共有する対象を、家庭の中から、ともだちや先生、地域の人々など、社会の中へと広げていきます。読書によって得られた知識や情報と自身の体験を基に自分の考えを形成し、他者とのコミュニケーションを図り、自らの世界をどんどん広げていくことでしよう。

時には問題にぶつかり、迷ったり、悩んだりするかもしれませんが、そんな時でも読書を通じて得た知識や情報を調べる力が身の回りの課題を解決する役に立つはずです。

冒頭で「子どもたちにとって図書館とはどのような場所か」と投げかけましたが、図書館は子どもの興味関心を揺さぶる「楽しい」「ワクワク」にあふれた、知識と情報の宝庫です。

図書館を利用する子どもたちをみても、毎日のように本を借りにくる子、夏休みの自由研究や宿題のときに利用する子、全く利用したことがないという子、子どもを取り巻く環境やライフスタイルの変化など様々な事情によって図書館を訪れる頻度には差がありますが、では図書館を利用しているのは本好きで、利用しない子は読書離れなののでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。

毎年多くの子どもたちが遠足や見学で図書館を訪れますが、たくさんの本に囲まれるとみな目を輝かせます。図書館に来て思い思いに好きな本を手にとって読んだり、読み聞かせに聞き入ったりする姿をみると、やはり子どもは本が好きなのだと感じます。子どもたちは本の魅力や読書が与えてくれる力に気付いているのではないのでしょうか。だからこそ、たくさんの本を目の前になると、好奇心旺盛な子どもたちは目を輝かせて夢中になるのだと思います。

親子で読書に取り組むみなさんもぜひ図書館に来て、いっしょに「楽しい」を探してみてください。きっとワクワクする本との出会いが待っているはずです。



## 令和 3 年度鹿屋市PTA研究大会準備委員会

●委員長

谷村 喜崇 (市 P 連 副 会 長)

●副委員長

安田 謙太郎 (市 P 連 副 会 長)

●運営委員

鈴木 誠 (吾 平 小 学 校 校 長)

川筋 順也 (鹿 屋 小 学 校)

福満 成一郎 (寿 北 小 学 校)

柿元 直子 (第 一 鹿 屋 中 学 校)

